

# 北海道・東北北部における土偶型式

## －縄文時代中期後葉～末葉－

成田 滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター）

### 趣 旨

今回の論考は、青森県を中心とした縄文時代中期後葉～末葉にかけての土偶を概観する。本県では土器型式の議論は活発であるが、土偶型式の研究は活発ではないその事は数の少なさも一因であろう。新たに共伴関係を中心として土偶形式を設定（堀合土偶型式・天戸森土偶型式・一本松土偶型式）し、型式内における形態の三要素（無脚タイプ・有脚タイプ・省略形タイプ）のタイプが存在している事を指摘したい。また、当該期における土偶減少は、東北地方では三角形土偶、北海道では岩偶の省略形タイプが増加し他のタイプが減る傾向を呈示した。

### 1. 中期後葉～末葉の土偶研究史

円筒上層期以降の土偶の研究は、江坂輝弥氏が1960年に発表した円筒上層期の土偶を第1類土偶とし、それに後続する土偶として最花遺跡から出土の土偶を位置づけたのが初まりと思われる（江坂1960）。青森市三内沢部遺跡（青森県1978）では、円筒系の土偶と大木系の土偶に二分して記載した。その後、1981年に鈴木克彦氏は、縄文時代中期の土偶を前半と後半に大別し、後半の土偶を更に中葉以降及び末葉と二分している（鈴木1981年）。村越潔は『円筒土器文化』を発表し、その中で土偶に関して江坂氏の考え方と同調した意見である（村越1984年）。

1992年に国立歴史民俗博物館で刊行した『土偶とその情報』（国立歴史1992）は、全国の土偶を各県毎に記載している。北海道では、長沼孝氏（長沼1992）が中期中葉～後半の時期の資料20遺跡の26個体を提示した。秋田県では富樫泰時氏・武藤祐治氏（富樫・武藤1992）が東北地方北半部、大木8b・9式の大木遺跡及び大木10式の本道端遺跡出土の土偶報告をおこなっている。また中期後葉では、円筒土器様式の伝統をもつ土偶と、両者の特徴を合わせ持つ土偶の二者の存在も指摘した。1999年には鈴木克彦氏が土器型式に沿った土偶変遷を発表した（鈴木1999）。1類～4類と土器型式毎に土偶を分類している。このことは円筒上層期以降の数少ない土偶を用いて、土偶編年を組み立てた事は評価すべきである。小笠原雅行氏（小笠原2002）は青森県史において三内丸山遺跡を分析し、

東北地方南部土器型式	東北地方北部土器型式	北海道道南部土器型式	土偶型式
大木8 a	円筒上層 e	見晴町	石神土偶型式
大木8 b	榎林	大安在 B	堀合土偶型式
大木9	最花	ノダンプ II	天戸森土偶型式
大木10	大木10式併行期	レンガ台	一本松土偶型式

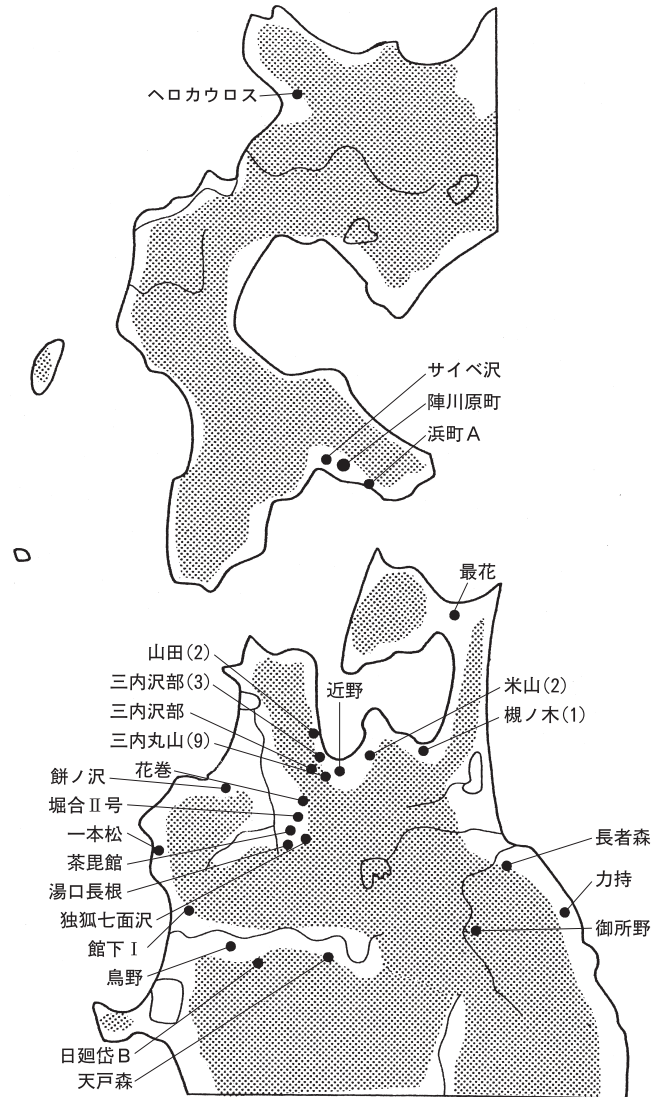
第1表 中期後葉～末葉土器編年表

円筒土器上層以降の『…榎林式期のものは、角状に突き出した頭部、直線的な腕部、横位と渦巻状の沈線が施文された胸部などが特徴としてあげられる…』<sup>(注1)</sup>として記載し、最花遺跡の土偶を榎林式期に含めており、鈴木報告の延長と考えられる。

## 2. 地域区分と土器型式 (第1図)

今回対象とした区域は、東北地方北部地域を秋田県では米代川流域、行政区分で能代市・北秋田市・鹿角市等地域である。岩手県では馬淵川・新井田川・安比川流域であり、行政区分では二戸市・一戸町・久慈市等である。北海道では墳火湾の森町から日本海岸の泊地区のラインを一つの地域区分とした。この地区は、縄文時代前期中葉～後期中葉にかけての間、同一型式土器を出土する地域といえる。

今回の土器型式の筆者の考え方は、第1表のごとく、東北地方と北海道地方では、土器型式を異にする。東北地方北部では円筒上層<sup>(注2)</sup>e式以降、榎林式→最花式→大木10式併行期と三区分に理解し、北海道道南部では見晴町式(円筒上層e式)以降、大安在B式→ノダップⅡ式→レンガ台式と、余市式の影響を受けた土器型式が存在する。東北地方・北海道の土器型式の縦軸と横軸の関連は第1表を参照していただきたい。



第1図 掲載遺跡

## 3. 土偶型式と指票となる事例

土偶型式を設定するにあたっては、土偶がすべて整っている土偶を命名の土偶型式とした。そのため出土量が多い遺跡、例えば鱒ヶ沢町の餅ノ沢遺跡(青森県2000)より出土量が少ないが全体の形状が整っている深浦町一本松遺跡(深浦町1980)の土偶を土偶型式の代表型式とした。また、最花式期については共伴遺物から出土した土偶を指票とする天戸森土偶型式・大木10式併行期を一本松土偶型式とする。土偶編年を設定するにあたっては、発掘調査における層位出土の観点と遺構内における共伴遺物のセット関係が良好なものが土偶編年の指票であると理解する。層位面での出土は、現時点で良好な出土例は少なく、共伴遺物からの事例から縦軸編年を組み立てたい。ただし、共伴遺物がすべて正しいという訳ではない。<sup>(注3)</sup>なお、三内丸山遺跡では1,700点の土偶が出土し、36冊の報告書が出版

され、土偶の分析は期待される場所であるが、現実には土偶が多く出土した南盛土（青森県2009）では各トレンチの層位の時期と整合性が判断できず、遺構外のⅠ～Ⅲ層（青森県2004）も層位の設定時期が不明瞭であり、遺構内の共伴関係も希薄といえる、そのため現時点での三内丸山遺跡の報告は、中期後葉以降の土偶分析には期待が持たれない。

#### 4. 土偶型式における形態（第2図）

各期における土偶型式には、型式内において形態から見ると三タイプが確認される。<sup>(注4)</sup>

##### 有脚タイプ（第2図-1）

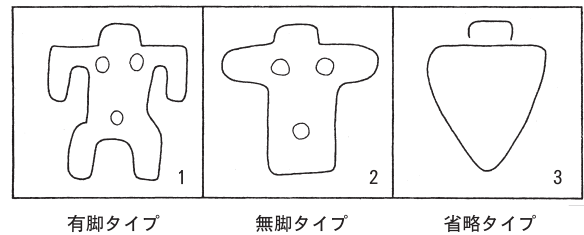
脚部を有するものであり、脚部が長いものと短い短足の形態がある。腕部はなで肩といかり肩の二種が見られるが、基本的にいかり肩を呈する。

##### 無脚タイプ（第2図-2）

脚を有さない無脚のもので、腕を平行にするものと腕をあげた万歳形がみられる。脚は平坦で自立できるものもみられるが、端部が湾曲したものが多く、一般には自立できないものが多い。

##### 省略タイプ（第2図-3）

腕部・脚部を簡略したものである。頭部を作出するものと、全体を三角形で表現し、土器片を利用したものではなく粘土を用いて製作した三角形土版や礫を用いた三角形岩版が省略タイプの分類に属する。



第2図 土偶型式内の形態

#### 5. 土偶型式の概要

##### ・堀合土偶型式（第3図）

本型式は榎林式期に相当する。堀合Ⅱ号遺跡から出土した(1)を標式型式としている。発掘資料ではなく葛西励氏は大木10式併行期の包含層から相似した顔部が出土しており、その形態から考えて中期末葉期と考えている。<sup>(注5)</sup>しかし、筆者は土偶に施文されているタスキ掛け文様から円筒上層e式のモチーフの系譜を持つものとして榎林式期に位置づけさせている。形状は顔面がやや前に突き出ており、肩はいかり肩を呈し脚部を有する有脚タイプである。文様は乳部に粘土粒を貼り付け、股間には性器を表現している。胸部にはタスキ状の文様を施文し、下半部に斜位状文・脚部に横位沈線を施文している。また肩から腕部にかけては連続刺突を施文している。近野遺跡（青森県2007）出土の(8)は、左半部が残存している有脚タイプであり胸部の上部に横位方向の波状文を施文している。(4)は三内丸山(9)遺跡（青森県2007）で顔部から体部まで残存している無脚タイプである。文様は顔部からへそ部には直線と短沈線、裏面にJ字状文様を施文している。三内沢部遺跡（青森県1978）で、無脚の小形な無脚タイプ(6)と刺突文を施文した三角形土偶(5)である。

秋田県における様相は、鳥野遺跡（二ツ井町1994）から下半部の無脚タイプが出土している。へそ部を中心として渦巻き文を施文している。岩手県における様相は、力持遺跡（岩手県2008）のBⅡd11住居跡から出土した土偶である。(2)は腕部を広げた無脚タイプであり、乳房部のみを表現した無文の土偶である。北海道における様相は、へロカルウス遺跡（北海道1987）のA区は見晴町式及び榎

林式の層位から出土したもので、本型式に属した。頭部と腕部の無脚タイプ(7)である。陣川原町遺跡(田原1990)(8)は、顔面に刺突・胸部に弧状と連続刺突・下半部に円形文(性器?)を施文している。

#### 共伴土偶

地 区	遺 跡	遺 構	形 式	図	文 献
岩手県普代村	力持遺跡	B II d 11住居跡	堀合土偶型式	第1図-2	岩手県2008
青森県青森市	三内沢部遺跡	第23号堅穴住居跡	堀合土偶型式	第1図-6	青森県1978
青森県弘前市	独孤七面山遺跡	9号溝跡	堀合土偶型式	第1図-10	弘前市2001

#### ・天戸森土偶型式(第3図)

天戸森遺跡(鹿角市1984)から出土した土偶を天戸森土偶型式と呼称したい。第26・87号堅穴住居跡から出土した。(13)は顔部から胴部にかけての無脚タイプである。顔面がやや前に突き出しており、腕部には縦位の短沈線、顔面から体部にかけて地文縄文地に横位・鍵状文様を施文している。(14)は体部のみの残存部位で、中心部に直線と斜位の沈線を施文した文様である。

青森県における様相は、(11)が最花遺跡から出土し江坂輝弥氏(江坂1960)が紹介した土偶である。頭部から胸部にかけて残存している。下半部は不明である。村越潔氏(村越1984)は、腕の長さから脚を有した土偶であると記載しているが、残存部では判断できないため無脚タイプとする。頭頂部は二又に分かれ耳状を呈し頭部の裏側は張り出している。この頭部の張り出しは一本松土偶型式の張り出しと共通性を有するものである。目・鼻・乳房部に粘土粒を貼り付けている。文様は地文地に円形・矢羽状文様を施文している。三内沢部遺跡(青森県1978)(12)は、動物型土製品としているが、筆者は耳部をもつ顔面土偶の一部と考えている。(15)は刺突列を施文した三角形土偶である。北海道からは出土していない。

#### 共伴土偶

地 区	遺 跡	遺 構	形 式	図	文 献
秋田県鹿角市	天戸森遺跡	第26号住居跡	天戸森土偶型式	第3図-13	鹿角市1984
秋田県鹿角市	天戸森遺跡	第87号住居跡	天戸森土偶型式	第3図-14	鹿角市1984
青森県青森市	三内沢部遺跡	第12号住居跡	天戸森土偶型式	第3図-12・15	青森県1994
青森県青森市	三内丸山遺跡	第22号住居跡	天戸森土偶型式	第3図-1	青森県1978
青森県青森市	近野遺跡	E54号堅穴住居跡	天戸森土偶型式	第3図-16~18	青森県2005

#### ・一本松土偶型式(第3・4図)

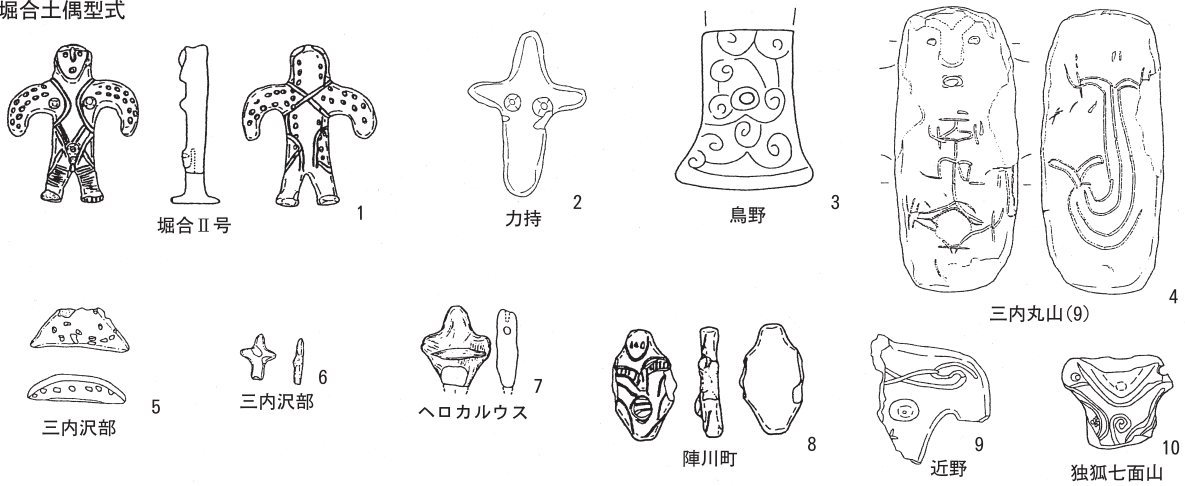
一本松土偶型式は、原田昌幸氏(原田2010)が提昌したものであり、筆者もこの名称を用いることとする。深浦町一本松遺跡(深浦町1980)から出土し、配石遺構の脇からほぼ完形の状態で出土した。形態は横に広がる腕部と脚部を有さない十字型の無脚タイプである。顔面はまゆ及び鼻を粘土紐で表現し、目・口は刺突で表わしている。特に頭部の後頭部に特徴があり、コブ状に張り出した部位に貫通孔がみられるものである。乳房部とへそ部を粘土粒で表わし、側縁部に沿って連続刺突で表現しており刺突文を多様している。この型式では、鯨ヶ沢町の餅ノ沢遺跡(青森県2000)で100点の土偶が

出土している。第1号遺物包含層と第1号捨て場から出土しているが、第1号遺物包含層は人為堆積であり盛り土と思われ、第1号捨て場は自然堆積ではあるが層位出土が不明瞭であり、層位の出土が判断できない。形態は無脚タイプが腕部が横に水平なもの(19)と上にあがる万歳タイプ(23)の二種の形態が確認される。有脚タイプ(36)は、脚が短くいかり肩の形状である。省略タイプは脚部が鋭角状で頭部が小さいものである(40)。槻ノ木(1)遺跡(青森県1995)(32)は、乳房部を指頭でおさえ、垂れ下がった状態を表現している。三内沢部(3)遺跡(青森県2005)では頭部の小さい省略形タイプである。山田(2)遺跡(青森県2009)の(27)は、形態が万歳形で頭頂部が耳状に二又に分かれており、最花式土偶型式の系譜を引きついだ事も考えられるものである。刺突文様には、花巻遺跡(黒石市1988)・茶毘館遺跡(青森県1988)(28)の側縁部に沿った刺突列と、(25)のように、体部の中心部に一条の刺突列がみられるものが存在する。長者森遺跡(青森県1983)(29)は、刺突の間に短いアクセント文様を施文しており、後期の野場土偶型式に近い文様である。秋田県における様相は、日廻袋B遺跡(秋田県2005)の(45)が、体部下半のへそ部周縁に連続刺突を施文している。館下I遺跡(秋田県1979)では顔面が前に突き出し、頭部が張り出す形態である。体部は、へそ部を中心として直線状の凹みがあり、側縁部に連続刺突を施文している。ヲフキ遺跡(秋田県2003)(46)は、正面に「の」字文を施文し、裏面に連続刺突を施文している。「の」字文は一本松遺跡(30)と類似した文様構成である。岩手県における様相は、御所野遺跡(一戸町1993・2004)及び大平遺跡(一戸町2006)から出土した土偶が本型式に該当する。体部に沿って直線状に連続刺突を施文している(48)。北海道における様相は、サイベ沢遺跡で、有脚タイプで全面に刺突を施文(50)しており、浜町A遺跡(戸井町1991)では三角形土偶の省略タイプに刺突を施文している(51)。

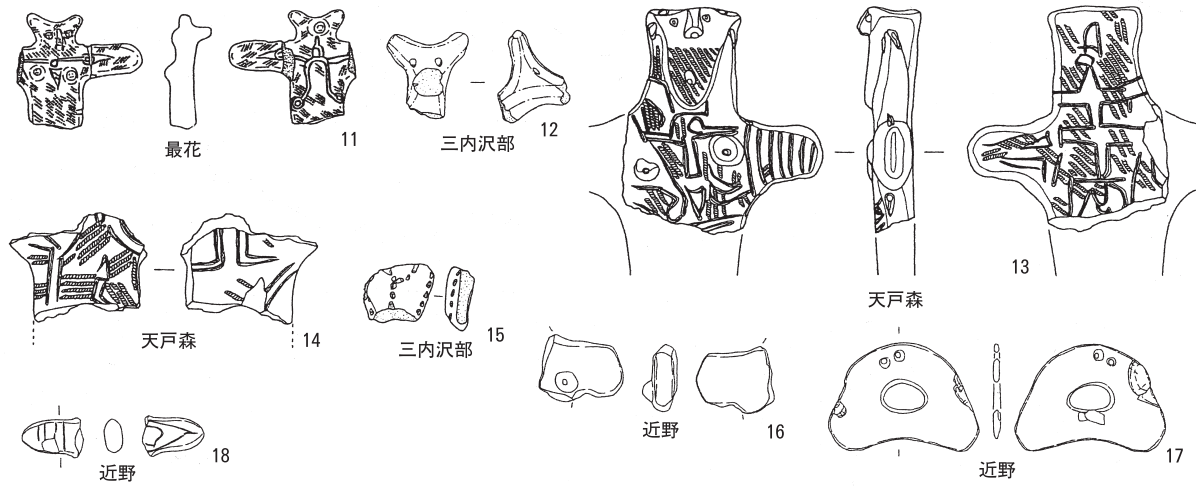
#### 共伴土偶

地 区	遺 跡	遺 構	形 式	図	文 献
青森県深浦町	一本松遺跡	配石遺構	一本松土偶型式	第3図-19	深浦町1980
青森県青森市	三内丸山遺跡	第1号堅穴遺構	一本松土偶型式		青森県1994
青森県野辺地町	槻ノ木(1)遺跡	第3号土抗	一本松土偶型式		青森県1995
青森県黒石市	花巻遺跡	第6号土抗	一本松土偶型式	第3図-21	黒石市1986
青森県相馬村	湯口長根遺跡	第1号住居跡	一本松土偶型式	第3図-24	相馬村1999
青森県相馬村	湯口長根遺跡	第2号住居跡	一本松土偶型式	第3図-22	相馬村1999
青森県蓬田村	山田(2)遺跡	第19号住居跡	一本松土偶型式	第3図-27	青森県2009
岩手県一戸町	御所野遺跡	I C126粘土採掘坑	一本松土偶型式	第3図-49	一戸町2004
岩手県一戸町	御所野遺跡	F J-58-01 J	一本松土偶型式		一戸町2006

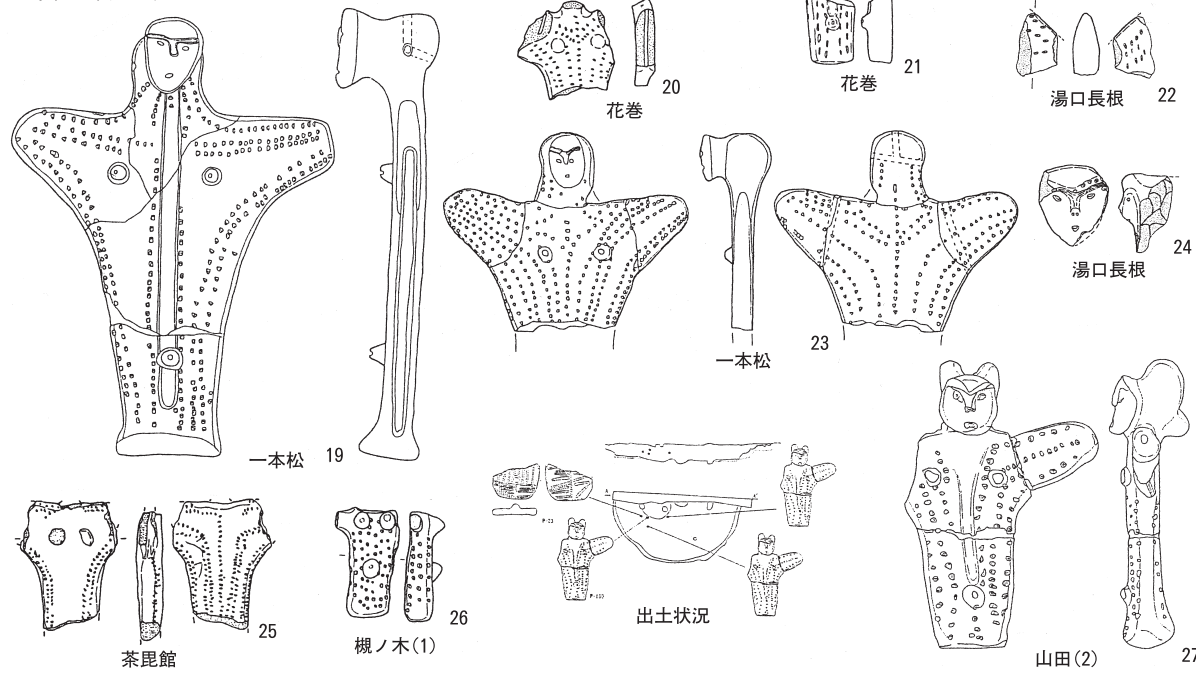
堀合土偶型式



天戸森土偶型式



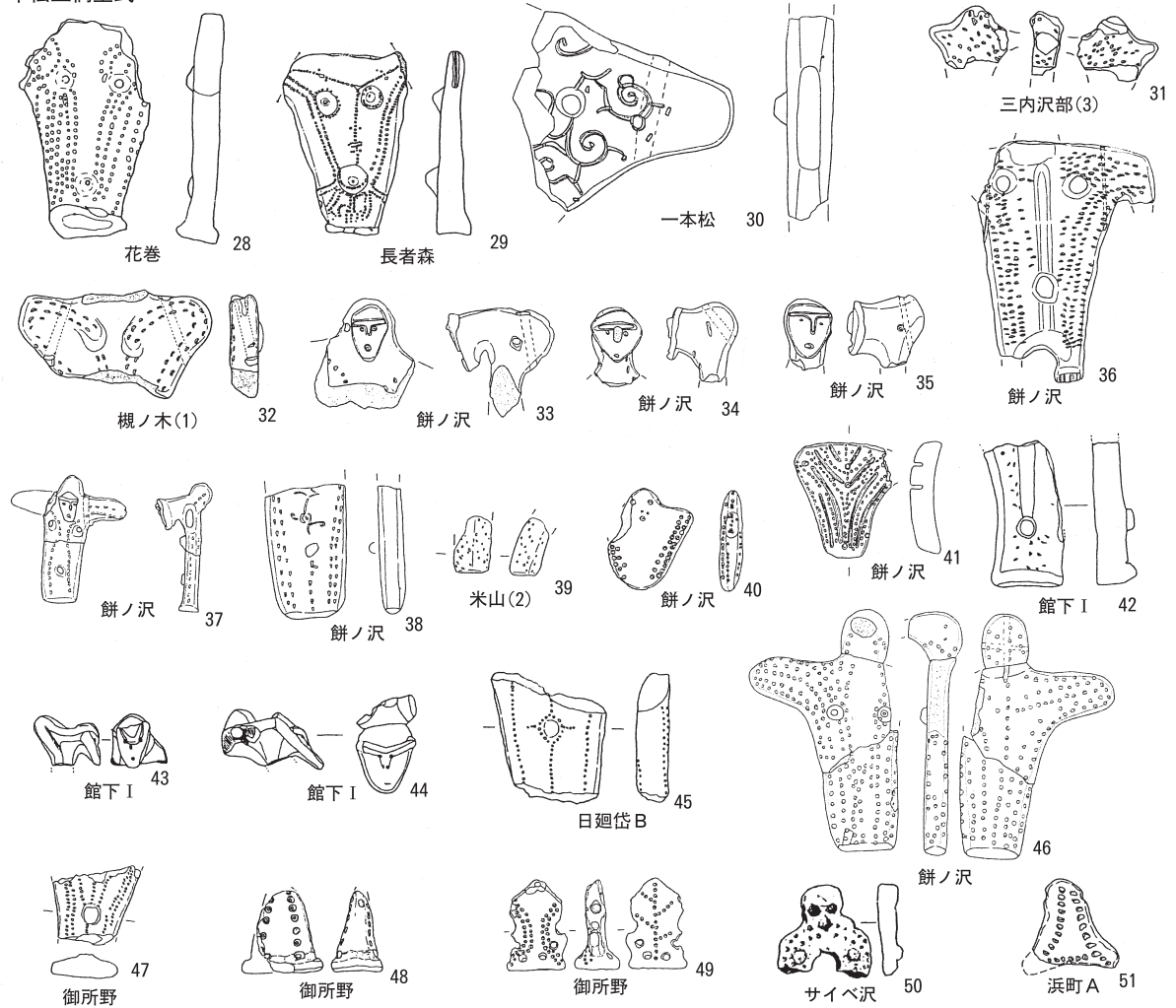
一本松土偶型式



1・8・11は縮尺不同、他は4分の1

第3図 堀合土偶型式・天戸森土偶型式・一本松土偶型式

一本松土偶型式



48・50は縮尺不明、他は4分の1

第4図 一本松土偶型式

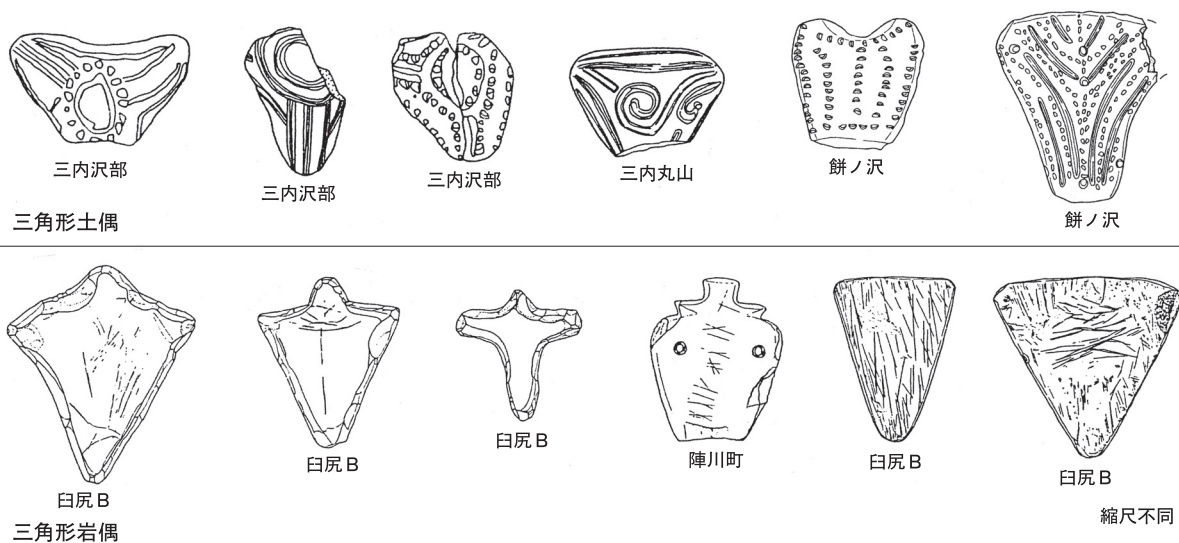
6. 各土偶型式のまとめ

中期後葉～末葉にかけて、榎林式に堀合土偶型式・最花式に天戸森土偶型式、大木10式併行期に一本松土偶型式を設定し、各土偶型式の概要を記載した。共伴遺物との関連から見ると堀合土偶型式は、型式設定に関してはやや弱い面もあるが、堀合土偶型式の施文される文様構成が、より円筒上層e式段階の石神土偶型式に類似する面が多く、石神土偶型式に後続するものと位置づけた。なお、無脚タイプは、円筒上層期の伝統を引きついで両手を広げた十字型の形状であり、一本松土偶型式の段階で両手を上げる万歳形の形状が出現する。有脚タイプは、後期中葉期の段階で有脚に変容することは事実であるが、無脚→有脚というオタマジャクシ<sup>(注6)</sup>理論ではなく、円筒上層期以来、有脚タイプの存在があり、円筒上層期の無脚タイプから逸脱する有脚は、東北地方南部の大木式土器文化圏の影響を受けたものと考えたい。省略形タイプは三角形土偶と考える各土偶型式の変遷を提示することは難しいが、Y字状刺突列を施文するものが一本松土偶型式に、中央部に渦巻文を施文するものがより古い段階と筆者は理解している。

## 7. 中期後葉期の様相

中期後葉期における土偶の様相は、永峯光一氏（永峯1977）の中期後半期に土偶が増加するという指摘なのだが、なにをもって土偶が増加するのかよく訳からない、林謙作氏（林1965）の東北中部の大木9式期には土偶が姿を消し、土製仮面が変わるという設で当該地域でも土偶は減少しており興味ある設である。しかし、前記で記載したように、土偶型式に三タイプ（無脚・有脚・省略形）が存在しており、この三タイプの共伴は後期中葉期に至るまで継続したと考えられる。つまり、中期後葉期～末葉期の段階は、無脚といわれている十字形土偶が継続しながらも、三角形土偶<sup>(注7)</sup>の省略形タイプが各型式間において増加し、省略形に変容していくものと考えられる。形態を三角形を呈するもので粘土で製作されたものを三角形土版、石質のものを三角形岩版と名称されていた。用途に関しては、三角形土版を土偶である認識（田辺1990・鈴木1995）と土偶を否定する（成田1974・阿部1999）という二者の考えに分かれる。筆者は2009年の中平遺跡の報告書（成田2009）で記載したが、首のない省略形の土偶であり、その形態は無脚の土偶から派生した形態と考えており、三角形土偶・岩偶・三角形岩偶と認識した。三角形土偶の文様は、三内沢部遺跡で中心部に円形及び渦巻文を施文する特徴を有する。刺突列はY字状及び側縁部に沿った刺突を施文しており土偶文様と類似している。岩偶は円筒下層期の肩パット岩偶の系譜ではなく、十字形土偶の関連性を考えるべきと指摘している（長沼1999）。形態は頭部を持つ岩偶と、逆三角形の三角形岩偶の二種の形状が確認される

時期は、東北地方南部で中期前半から出現するが、当該地域では中期後葉～末葉の時期である。なお三角形土版は後期前葉・晩期と三時期で製作される。岩偶は中期中葉～後葉の段階で北海道で多く製作される。一方東北地方では製作されておらず、中期後葉～末葉の段階で三角形土偶と岩偶が対峙するという現象がみられる。当該期では東北地方北半部で三角形土偶、何故このような傾向になるのかはよくわからないが、一つの現象として独自の地域文化の崩壊、つまり円筒上層期の段階に至るまで東北地方北部では円筒上層d・e式が存在し、北海道においてもサイベ沢VI・VII式と型式名称は変わるものの、同一の土器文化圏と認識している。その後、東北部では東南北半部の大木式文様（渦



第5図 三角形土偶・三角形岩偶



巻文・磨消縄文・隆沈線文)の影響を受け、北海道では余市式文様(地文縄文・バンド)の影響を受けた土器が誕生した。このことは独自の地域文化が崩壊(変容)していく段階と土偶減少傾向と符合しており、関連が強いものと考えられる。

## 8. おわりに

今回の論考は、出土層位と共伴関係によって構築しようと考えた。しかし、その試みは土偶の増加と共伴遺物が増える一本松土偶型式と天戸森土偶型式では一つの土偶型式として間違いないと思われる。ただ、それ以前の堀合土偶型式は共伴遺物が少なく、土偶文様にたよった変遷である事は否定できない。土器文様と土偶文様の関係は、一本松土偶型式の土偶文様と土器文様の関連をみると、刺突文というのがキーワードであると思われる。確かに土器にも刺突文を用いるが、それは主体的な文様ではなく副次的な文様(土器におけるワンポイントの文様)である。つまり土器文様との関連はみられるものの、独自の土偶文様であり変遷していったと考えられ、縄文時代後期I期の野場土偶型式<sup>(注8)</sup>に引き続いたものと考えられる。今後の資料増加(特に三内丸山遺跡の再評価)によって土偶型式の再構築を進めていきたい。

## 注

1. 今回、青森県史で記載されている榎林式期の土偶を探すことができなかった。
2. 鈴木克彦氏は、円筒上層e式を認めていないため、泉山式・中の平I式を設定しているが、筆者は円筒上層e式を認めている。榎林式以降は地域の土器型式であるため、円筒上層の伝統を引いており、円筒上層f・g・h式として型式設定していいのではと考えている。
3. 三内丸山遺跡では1,700点の土偶が出土しているといわれているが、36冊刊行の報告書の中で何点の土偶が報告されているのかは定かでない。
4. 以前筆者は「目立たない土偶」(成田1999)で無脚土偶・立脚土偶と大別したが、無脚に対して有脚という表現に変更する。また、省略形を無脚の中に分類していたが、省略タイプに分類する。
5. この土偶については、葛西励氏は1985年刊行の『十腰内I式土器文化の研究(1)』「燃糸文」第14号で中期末葉期と位置づけていることを平成22年12月に葛西励氏から御教示を受けた。
6. オタマジャクシ理論は、土偶の変化を手が出て足が出てくるという後期十腰内I式の土偶時にみられる土偶形態の変容を表しているものである。
7. 三角形土偶については、三角形土版と理解する方と意見が二分されるが、筆者は三角形土偶として理解している。
8. 縄文時代後期前葉期の段階は、野場(5)遺跡出土の土偶を用いて野場土偶様式としたい。

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会(1978)『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集  
 青森県教育委員会(1988)『茶毘館遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第110集  
 青森県教育委員会(1983)『長者森遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第74集  
 青森県教育委員会(1994)『三内丸山(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集  
 青森県教育委員会(1995)『槻ノ木(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第169集  
 青森県教育委員会(2000)『餅ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第278集  
 青森県教育委員会(2005)『近野遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第394集

- 青森県教育委員会 (2007) 『近野遺跡X』 青森県埋蔵文化財調査報告書第432集  
青森県教育委員会 (2007) 『三内丸山(9) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第434集  
青森県教育委員会 (2009) 『山田(2) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第469集  
秋田県教育委員会 (1979) 『館下I 遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第62集  
秋田県教育委員会 (2003) 『ヲフキ遺跡』 秋田県文化財調査報告書第352集  
秋田県教育委員会 (2005) 『日廻岱B 遺跡』 秋田県文化財調査報告書第394集  
阿部明彦 (1999) 「三角形土製品について」 『土偶研究の地平3』 勉誠出版  
一戸町教育委員会 (1993) 『御所野遺跡I』  
一戸町教育委員会 (2004) 『御所野遺跡II』 一戸町文化財調査報告書第48集  
一戸町教育委員会 (2006) 『大平遺跡』 一戸町文化財調査報告書第56集  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (2008) 『力持遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第510集  
江坂輝弥 (1960) 『土偶』 校倉書房  
江坂輝弥 (1990) 『日本の土偶』 六興出版  
小笠原雅行 (2002) 『青森県史別編 三内丸山遺跡』 青森県  
鹿角市教育委員会 (1984) 『天戸森遺跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料26  
金子拓男 (1995) 「三角形土版・三角形岩版」 『縄文文化の研究9』 雄山閣出版  
黒石市教育委員会 (1986) 『花巻遺跡』 黒石市埋蔵文化財調査報告4  
黒石市教育委員会 (1988) 『花巻遺跡』 黒石市埋蔵文化財調査報告書第7集  
鈴木克彦 (1981) 「土偶の研究序説」 『調査研究年報第6号』 青森県立郷土館  
鈴木克彦 (1999) 「大木系(土器)文化の土偶の研究－土偶の研究(3)－」 『土偶研究の地平3』 勉誠出版社  
相馬村教育委員会 (1999) 『湯口長根遺跡』 相馬村文化財調査報告書第1集  
田辺早苗 (1990) 「三角形土偶」 『季刊考古学第30号』 雄山閣出版  
田原良信 (1990) 『陣川原町遺跡』 函館市教育委員会  
戸井町教育委員会 (1991) 『浜町A遺跡II』  
富樫泰時・武藤祐治 (1992) 「秋田県の土偶」 『国立歴史民俗博物館研究報告第37集』 国立歴史民俗博物館  
永瀬光一 (1977) 「呪め形象としての土偶」 『日本原始美術大系3』 講談社  
長沼孝 (1992) 「北海道の土偶」 『国立歴史民俗博物館研究報告第37集』 国立歴史民俗博物館  
長沼孝 (1999) 「北海道の土偶」 『土偶研究の地平3』 勉誠出版社  
成田滋彦 (1997) 「深浦町一本松遺跡の土偶」 『青森県史研究第1号』 青森県  
成田滋彦 (1999) 「目立ない土偶」 『土偶の研究地平3』 勉誠出版社  
成田滋彦 (2009) 「第4章分析・考案 第3節土偶・土製品」 『中平遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第474集  
成田英子 (1974) 「日本石器時代における土版・岩版の研究」 『遮光器8号』 みちのく考古学研究会  
二ツ井町教育委員会 (1993) 『鳥野遺跡第4次発掘調査概報』 二ツ井町文化財調査報告書第3集  
二ツ井町教育委員会 (1994) 『鳥野遺跡第5次発掘調査概報』 二ツ井町文化財調査報告書第5集  
林謙作 (1965) 「東北」 『日本の考古学II 縄文時代』 河出書房新社  
原田昌幸 (2010) 「土偶とその周辺I」 『日本の美術526』 至文堂  
弘前市教育委員会 (2001) 『独孤七面山遺跡発掘調査報告書』  
深浦町教育委員会 (1980) 『深浦町一本松遺跡－第二次発掘調査報告書－』  
北海道文化財研究所 (1987) 『へろカルウス遺跡』 北海道文化財研究所調査報告書第3集  
村越潔 (1984) 『円筒土器文化』 雄山閣出版